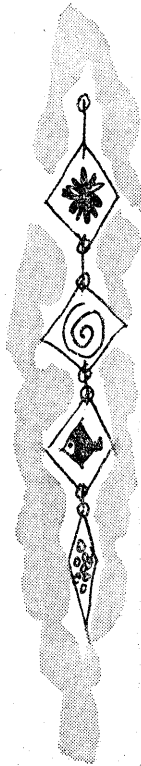


## 保育環境論

―屋内保育施設に関する基本的考察（その二）―



塩川 寿平

### 六 幼児の人格形成をとらえる保育

#### 効果測定のための視点提起

一つの考えのもとに、N園々舎は完成した。今までの仮説が正しかったか、その評価を今後の臨床観察及び調査の中で行ってきた。一年の保育過程を通して、明らかにしつつある視点を提起し、今後の研究の方向、客観的保育効果測定の方法を考えたい。

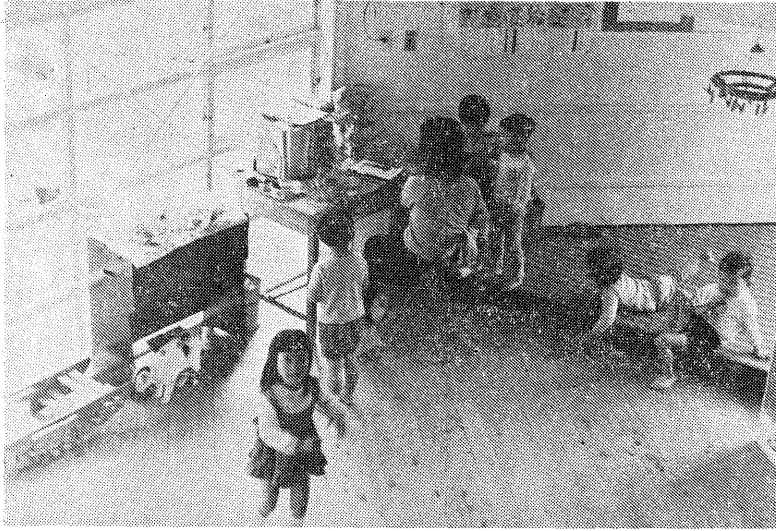
#### 1 三角コーナーと保育

子どもはすみっこが好きである。タンスの裏に入ったり、縁側のすみっこ、押入れの中に好んで入る。そこで考え出されたの

が、この三角コーナーである。保育室の一方を鋭角に曲げたのである。この部分は、床を一段高く（二〇センチ）上げ、ジュエターが敷かれている。

実によく利用されている。寝ころんで絵本を読む子ども。人形をかかえて、ままごとを始めるグループ。山のように積木をつみ上げて、塀をつくり、三角コーナーを独占している子ども。ゲームの安全地帯としての利用。

狭い場所、そして、やや暗い場所で人はなぜ落ち着くことができるのであろう。子どもたちがこれほどまでに、入れかわり利用する喜びはなにか明らかにしたい。



三角コーナーと木の床

## 2 遊具台（中二階）と階段と保育

高いところに昇りたい。高いところが好きである。そこで遊具台（中二階）が作られた。

階段を昇る、降りるそれだけでも、十分楽しめる遊びなのである。そこで、どの部屋にも階段が作られた。子どもたちは、日に何度ここを昇るであろうか。また昼寝の時、誰もが狭い遊具台に寝たがる。下の床で寝る者は、数少ない。高い所から見おろすことを、実に喜んで行く。上から、保母の名を呼び、ふり向いてやれば、それで満足する。友の名を呼ぶ、友が下から返事をする。笑顔である。コミュニケーションを楽しんでいる。高さ子どもについて明らかにしたい。

## 3 路地裏のコーナーと保育

保育効果を考えるにあたって、最もむずかしいコーナーである。安全管理という視点に立つと、疑問が持たれ、今日まで許されなかったコーナーである。理由は、保母の目が行きとどかないという点にある。逆にわれわれは、一日中、保母なり大人と同室することによって起こる抑圧の害を重くとらえた。すなわち中間的管理の空間、見えかくれする範囲において子どもの自治的な世界を作ろうとしたのである。自己主張を十分に認めようというの

である。昔、子どもたちが、町の路地裏でさかんに行った。メンコやビー玉、ベーゴマ遊びの復活である。そこにはギャングエイジグループの支配と秩序が生まれ、大人の入らない世界の喜びがある。女の子も、ケンパー遊びをしたり、あやとりをしたり、時にはメンコのグループに入ってくる。こうした空間で、長い時間子どもたちは遊びつづける。かつて、日がすっかり暮れて暗くなって家に帰り着き、どこに行っていたかと問われた著者の幼少時代を思い出すのである。特に、今日の子どもは、自由性、主体性に欠けるといわれる。こうした空間での自己にまかされた生活体験を必要としているのではないか。

#### 4 舞台と保育

プロムナードの一角に、きわめて解放的な舞台を設けた。どのクラスにも属さない場所である。使用時間も決っていない。時時、小さな催しものが開かれるだけで、平日は誰がどのように使用してもよい。高さが一メートルあり、観客席の遠くまでよく見わたせる。ちょうど野外舞台の感じである。誰かが演じ、誰かが見ているのである。お誕生会などがあると、そのときの自分たちの演じたテーマが日に日に変えられて演じられている。テレビのまねなどもさかんに行われている。誰も見ていないのに、熱心

に、なにやらわからないが演技が続けられていることがある。発表した、表わしたいという心があるのであろう。

#### 5 プロムナードと保育

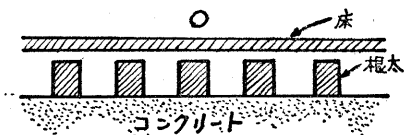
大変広い面積が、あちこちに生まれた。保育室をセパレートしたので、その間隔がすべてプロムナードとして生まれた。また、設計上生まれた露地についてもすべて、建物の中に含んだ。この部分は、室内でも戸外でもなく、中間のスペースである。材質は、土のままという、農家の土間を考えたが、うまく行かず、薄く、やわらかいアスファルトを敷いた。子どもたちは、あちこちにつながるこのプロムナードを、晴天・雨天の別なくかけ回っている。走り回ることの許された園舎である。しかし、ドタドタという音がしない。ヒタヒタという足の裏とアスファルトの音である。だから、学校の廊下で起こるような騒音の問題は起こらない。この点、アスファルトを使用したことは成功であった。冬の寒中の二ヶ月は靴下をはくが、N園では、スリッパも靴下もはかない。はだしである。

#### 6 床と保育

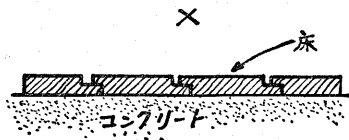
近代建築の盲点は床にある。コンクリートの上に根太(床下に

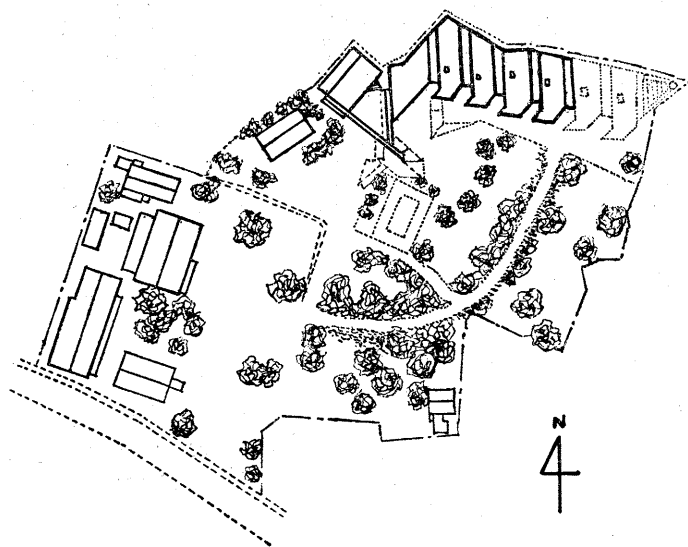
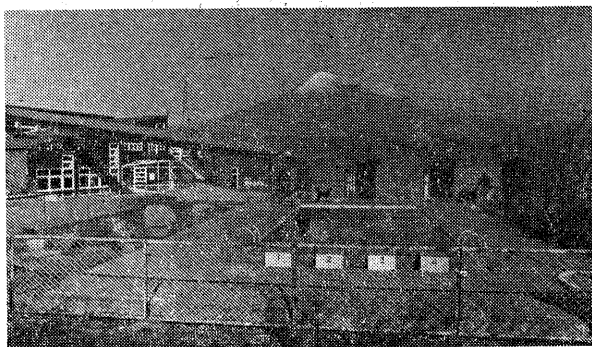
わたしたち横木)を置き、その上に木の板をはるといふ、第一図の工法が最もよい。臨床的に明らかになったことは、コンクリートに直接接着材で、ビニタイル、木タイルを敷く第二図の工法は、とりかえしのつかない誤りをおかすことになる。クッションがないために、ころぶと骨にひびくのである。子どもたちは、コチンとくるからだめだと述べる。また、ジャンプしてもひざや頭にひびくのである。保育上現われる欠かんとして、ふざけっこやすもうができないのである。禁止するわけではないが、何度か痛い目に合うと、やめてしまいか、消極的になる。受身もとれないのである。手でボンと床をたたいて、身を守る受身は、たたみや木の床でなければ育たないのである。やむなくジュータンを敷いている例を見るが、色によりカモフラージュされるのみで、機能的欠陥をおぎなうことはできない。このふざけっこやすもうが積極的にできないということは、肉体的健康よりも、友だちの間のボディコンタクトのチャンスを失わせ、精神的健康面で大きな損失となる。近代建築がもたらす、遊びの抑制について今後さらに調査研究を進め次回の報告としたい。

第一図



第二図



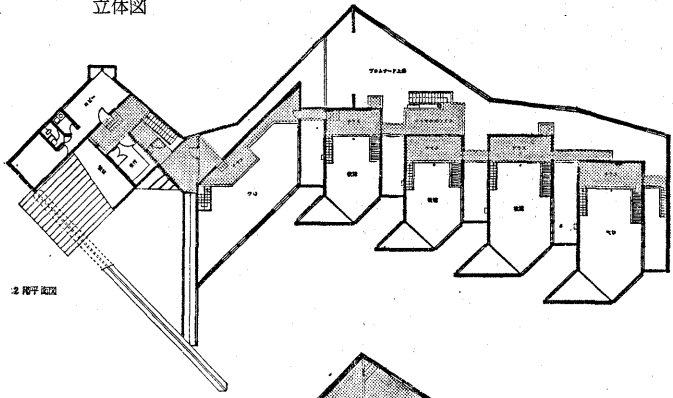


設計 環境デザイン研究所	工期 1972年2月～1972年10月
仙田満＋アトリエMAN&SPACE	敷地面積 6,600 m <sup>2</sup>
現場担当 坂詰東洋	建築面積 592 m <sup>2</sup>
構造設計 団設計同人 岩田孝 齋藤欽弥	延床面積 647 m <sup>2</sup>
設備設計 ユニ設備設計事務所	1階 592 m <sup>2</sup>
美門設備事務所	2階 55 m <sup>2</sup>
建築工事 石井組＋大和ハウス工業	総工費 3,200万円
構造 軽量鉄骨2階建	

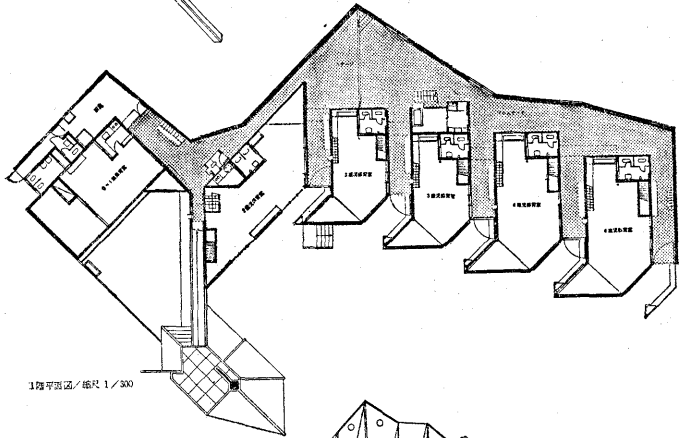
参考文献

注20 仁田満「N保育園」建報社「新建築」第47巻11月号 P249 S.47.11.1

N園園舎 平面図  
立体図



2階平面図



1階平面図/概尺 1/300

